

わさり変化していくデュオや群舞は、本当に見事。登場するダンサーが音とともに見事な宇宙を作り出している。踊りがしつかりと音とともに迫ってくる素晴らしい舞台だ。

ホフエッシュ・シエクター『ポリティカル・マザー』(六月二十五日、さいたま芸術劇場)。ホフエッシュはイスラエル出身、イギリスで活発に活動している振付家・ダンサー。パットシエバに若い頃在籍していたため、動きにはパットシエバのものがかなり入っている。特徴は、音楽とダンスとの関わり。ドラムを中心に音楽をやっていたこともあり、作品は音楽との関係が非常に強い。

舞台は甲冑を着けた武士のような姿の男が腹を刺して自決する場面から始まる。そして全体が暗いなか、デュオ、トリオ、数名のダンスが照明を切り替えて展開する。そのときに、ホリゾント、舞台背景に作られた空間に演奏者が登場する。パーカッションを一齐に鳴らす、ギターを一齐にという視覚的效果も考えた音楽作り。エレクトリックギター四台でベースなしという変則構成、パーカッションもドラムセットまでできることを分割して鳴らす。それによって、音の厚

みと重なりからポリフォニックな響きが生まれる。

次々に展開するダンスは絡み合うことが少ない群舞の構成。儀式のような要素も見える。自ら「フォークダンス」という所以だ。日本でいうフォークダンスではなく、直訳の「民族舞踊」。特定の民族の舞踊ではなく、民族舞踊的な要素が混じったダンス。全体に暗いなか、ロックギターと重たい音楽によって展開される構成自体も一種の儀式性を見



せる。パッパなどを扶みながら展開するホフエッシュの世界は、音楽と舞踊の可能性を追求する舞台である。

フィリップ・シエール「ジャンティエ・ボエティック・イン・プログレス」(五月二十日〜六月二十日、東京都現代美術館など)。フィリップ・シエールはフランスのモンペリエ国立振付家センターの振付家・ダンサーである。コンテンポラリーダンスを学んだが、日本で舞踏に触れたことで強い関心を抱き、

二〇〇三年に日本で舞踏家の小林嵯峨、藤條虫丸などとともにワークショップを行った。僕はそのときのワークショップ生の紹介で今回、募集に協力した。

ワークショップは東京都現代美術館と森下スタジオ、新宿御苑でそれぞれ一回ずつ行われ、六月二十日、公開ショーイングとトークが開かれた。そのワークショップは、ダンサー、病氣などハンディを持つ人、一般の人と一緒に出来るもので、いずれも「伝達」をコンセプトとして

いる。その一つは、縦一列に並んで最初の人が右手を上げる。すると次の人、次の次の人というように、それを伝えていくもの。模倣ではなく伝達なので、伝言ゲームのように変化・変容しても構わないとする。これを一列にならべて参加者を増やしていく。トップが入れ替わって指示者も変わると実に多様なアイデアで参加者自身も主体的に楽しめる。そしてそれは見る人にとっては、

一つのパフォーマンス、ダンスとして見えるから面白い。今回、フィリップはこれらのワークを舞踏家森繁哉や美術家宮島達男の教える山形の東北芸術大学、京都などで行った。東京都現代美術館のときも、数名観客が参加した。そして最終日のトークは東大のバトリック・ニュー・ボス、批評家の国吉和子、舞踏家の和栗由紀夫を迎えて行われた。

後日、西荻窪でフィリップに話してもらったときに、最後に観客を交えてこのラインワークを行い、街に出ていったが、行き合わせた子どもたちが参加するなど、実に自然な楽しいワークであることが実証された。そしてこの「伝達」はダンサーと人々をつなぐ一つの道だと実感された。